

『雨の朝』

霜月透子

4,075 文字

あらすじ

雨の日、わたしは早めに登校する。湿気で濡れた廊下にモップを掛けるためだ。次々と登校する生徒の傘から水が垂れると、またモップ掛け。誰に頼まれたわけでもないのにそんなことをするのは、小学生の頃に見た少女のことが記憶にあるからだった。

中学校の昇降口で傘を閉じると、今まで忙しない打楽器のように鳴っていた雨音は遠のき、ゆったりとしたやわらかな響きへと変わった。傘の留め具をかけると、束ねられた雫が、床に小さな水たまりを作った。低く垂れこめた雨雲で薄暗い朝の町を抜けてきたせいで、いつもなら気にも留めない昇降口の明かりが、今日は妙に眩しく感じられる。

明るさに慣れない目を細めつつ、靴を履きかえる。屈んだ拍子に濡れた制服のスカートが足に張り付き、わたしは小さく声をあげた。

まだ校舎にひと気はない。この雨では朝練をする運動部もなく、他の生徒が登校するには早すぎる。校門から歩いてくるときに職員室の明かりは見えただが、教室の窓はどれも暗く雨にかすんでいたから、わたししか登校していないのだろう。

二階の突き当りにある一組の教室に入り、窓際の自分の席に荷物を置くと、すぐさま掃除ロッカーからモップを取り出した。歪んだ扉がなかなか閉じない。勢いよく閉めなおすと、きちんと閉じた代わりにロッカーの中でゴトンとなにかが倒れた音がした。扉から手を離しても開く様子はないので、モップ片手に廊下に出る。

床にも壁にも結露ができていた。薄汚れて絡まっているモップの先を廊下の隅にあてる。ゲタの部分が壁にぶつかりコツンと音を立てたのをきっかけに、わたしは壁沿いを進んだ。濡れている床の上をモップはよく滑り、追いかけるわたしは早足になる。

そのまま一組の前を進み、二組の手前で折り返してくる。往路と復路は隙間なく接し、水の薄膜が剥がされた床を踏む上履きがキュッキュと鳴る。

一組の前の廊下の次は二組の前。行ったり来たり。閉めきられた廊下の窓に流れる雫は内か外かも定かではなく。視界の隅で膨らんだ雫がついと流れる。

何度か、拭かれる前の床に踏み込んでしまい、足を滑らせそうになってひやりとした。

雨の日の校舎は内側まで水に濡れる。だからわたしは一番に登校し、モップをかける。そんな係があるわけでもなければ、誰かに頼まれたわけでもない。それでもこんなことをするのは、小学生の頃に見た少女のことが記憶にあるからだった。

その子の名前をわたしは知らない。似たような背丈だったから、たぶん同じ学年だとは思いますが、クラスさえ知らなかった。

初めてその子を知ったのは六年生の秋だった。

その前日、わたしは宿題のプリントを机の中に置き忘れた。そのことを母に知られたわたしは、早めに登校してやっと思いなさいと翌朝早くに家を出されたのだった。母に叱られたことと、宿題をやらなければならないことと、置き忘れてしまった自分の情けなさと、それらに打ちひしがれているわたしの上に容赦なく降る雨とで、朝から泣きそうになっていた。それに、まだ誰もいない校舎に入るのも少し怖かった。雨のせいで辺りは薄暗く、濡れた校舎の外壁もいつもより黒ずんで見えた。一刻も早く慣れた教室に入り、明かりをつけたかった。

わたしは昇降口で傘を閉じると、水切りもそこそこに、ぼたぼたと連なる雫を垂らしながら廊下を進んだ。わたしが雨を持ち込まなくても、校舎の中はすでに湿気が満ちていて、辺り一面うっすら濡れていた。足を滑らせないように、けれども足早に教室を目指す。

雨音は校舎の中にも響いていて、足音などは聞こえなかったように思う。だから気配も感じなかったはずだ。わたしはただ漠然とした恐怖心から背後を振り返り向いた。誰もいないことを確かめ、安心して先へ進むために。

けれども視線の先には人がいた。それも一、二歩しか離れていないような場所に。

わたしは声も出ないほどに驚き、持っていた傘を落とした。バシヤリと水っぽい音が床に散った。それを見た少女はゆったりとした動きで傘を拾うと、くるくると手早く丸めて留め具をかけた。それから、真新しいぞうきんでサツとなでるように傘の雫を吸い取った。

「はい」

手渡された傘は水気を取り除かれ、ほんの少し軽くなっていた。

「あ……りがと」

少女はぞうきんをモップの柄に巻きつけてわたしを追い越して行く。わたしは、そのときようやく少女がモップがけをしていたことに気がついた。昇降口からここまで、わたしが傘から垂らし続ける雫を拭きとっていたのだ。

その日以降、注意深く見ていると、雨が降っても廊下が湿気で濡れているこ

とはなかった。だけど、わたしはもう知っていた。一度知ってしまうと、なぜ今まで気づかなかったのか不思議なくらいだ。

昇降口のあたりでモップを持つ少女を幾度となく見かけた。あのときのように、みんなの登校前に結露を拭き取ったのだろう。少女は次の行動のために控えていた。児童たちが登校し始め、新しく持ち込まれた雨の雫が廊下に落ちると、そっとモップで吸い取っていた。その姿はあまりに静かで、児童たちの声や雨音にさえ隠れてしまう。きっとわたしのほかは誰の目にも見えていなかったに違いない。

いつだったか、上履きに履き替えたらちょうど目の前に少女がいたことがある。

「……あ」

思わず声が出たが、相手がわたしを覚えているとは思えず、視線を逸らそうとしたときだった。

「おはよう」

そう声をかけられた。

「あ、うん、おはよ」

挨拶を返すと、少女はかすかな笑みを残して背を向けた。

「えっと、あのっ」

とっさに声をかけると、少女は振り向いて首を傾げた。つられてわたしまで首を傾げてしまう。なぜ呼び止めたのか自分でもよくわからなかったが、少女は言葉の続きを待っている。わたしは気になっていたことを聞いてみることにした。

「ねえ、それって、なにかの係なの？」

「そういうわけじゃないけど」

「じゃあ、なんでやってるの？」

「前にね、雨の朝、たまたま担任の先生と廊下で会ってね、挨拶をしたら、廊下が滑って危ないからモップをかけておいてくれって言われたの」

「けど、それってその日だけのことじゃないの？」

「うん……そうなのかもしれないけど、それからなんとなく気になっちゃって」

それ以来、雨の日は頼まれなくてもモップがけをしなければ気が済まなくなってしまうという。時にはその姿に気づく人もいて、点取り虫と揶揄されることもあるという。そういうのじゃないんだけど、と困ったように笑うから、うんそうだよ

ね、と相づちを打った。児童用の昇降口と職員玄関は離れていて、先生が少女を見かけることはないだろうと思われたからだ。

それきりその少女と話すことはなかった。雨が降るたびに、朝、少女の姿を見かけたが、わたしは手伝うでもなくその様子を遠くから眺めていたし、目が合っても、少女の方から話しかけてくることもなかった。

クラスも名前も知らないままに、わたしたちは小学校を卒業した。中学ではその少女を見かけないから、違う学区なのだろう。

中学の校舎も、雨の日は廊下や壁に結露が発生する。けれどもここにあの少女はいない。誰も拭かない床は薄い水の膜を張り、まるで校舎が巨大な生き物で、わたしたちはその体内に取り込まれていくかのように感じられた。それはどうにも落ち着かない気分で、わたしは誰に言われたわけでもないのに、雨の朝はいつもより早めに登校し、モップをかけるようになった。生き物の体内のようだった床は、晴れの日と変わらない校舎の廊下になり、わたしはやっと心穏やかになるのだった。

小学校での少女のように、点数稼ぎと誤解されたら困るなど思っていたが、擲揄するどころか、わたしのすることに気づく人は誰もいなかった。みんな、雨でも廊下が濡れるなどとは思っていないか、勝手に渴くと思っているのかもしれない。それでよかった。それがよかった。わたしは誰にも気づかれずに床を拭く。

使い初めには乾き切ってごわついていた房糸が、いつしかぐっしょりと水を含んで重くなっていた。手洗い場に行き、房糸をいくつかの束に分けて手で絞った。掃除用具入れには絞り機付きのバケツがあるが、すぐに水を含んでしまうのにその都度バケツまで戻るのは手間だった。

黒い水が絞れた。手のひらが細かな砂でざらつく。軽く手を洗い、再び廊下を拭きはじめる。

ちらほらと生徒が登校してきた。すれ違う人もいて、わたしの姿も目に入っているはずなのだが、見えてはいないようだ。誰とも目が合うことなく、声をかけられることもない。わたしはただひたすらに床を拭く。

初め、廊下の先に鏡があるのかと思った。そんなものはないと知っているのに、とっさに自分の姿を見たと思ったのだ。よく見るまでもなく、当然それはわたしではない誰かの姿だった。

廊下の向こうからモップがけをしてくる人がいる。見知らぬ人だ。目が合うと、あちらもハッとした表情を見せたが、すぐに作業に戻った。わたしもモップを握り直す。

登校してくる生徒が入り乱れる中、わたしたちは徐々に近づき、ついに中央階段の前で出会った。

「おはよう」

どちらからともなく、ただ挨拶だけをして、わたしたちはすれ違った。彼女は上の階へ、わたしは下の階へとモップを進める。

人が増えてきて、しだいに進みが遅くなる。通行の途切れた瞬間を見計らって素早くモップを動かした。勢いよく壁に当たった房糸がグチョリと音を立てた。

顔を上げると、いつの間にか廊下や階段に人が溢れていた。耳に届くざわめきが大きくなり、階段を上る足はどれも速度を増した。わたしは床を拭くタイミングを計れずに、モップの柄を抱えて踊り場の角に身を寄せた。

「おはよう！」

階段の下から手を振る姿がある。同じクラスの人だ。

わたしも、おはよう、と届かないほどの小声で答える。

予鈴が鳴った。

結露の残る壁や階段がキラキラと輝いている。踊り場の窓から日が差し込んでいた。

首をひねって空を見上げると、雨雲がものすごい勢いで流れていた。雲間から覗く生まれたての空は、控えめな青色をしている。

ふいに手元からモップが消えた。

「早くしないと先生来ちゃうよ」

消えたモップは、先ほどのクラスメイトの手に握られていた。

「ほら、早く！」

わたしたちは階段を駆け上り、朝日の差し込む廊下を進む。

乾いた床を踏むわたしたちの上履きが、キュッキュ、キュッキュと忙しく鳴っ

た。

(了)